

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：16101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23792595

研究課題名(和文)「高齢がん患者の生活史に注目した看護介入プログラム」の開発

研究課題名(英文) Development of the nursing intervention program which paid attention to living history of an old cancer patient

研究代表者

今井 芳枝 (IMAI, Yoshie)

徳島大学・ヘルスバイオサイエンス研究部・助教

研究者番号：10423419

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本調査より、高齢がん患者の生活史を活用することは、高齢者の持てる力を生かした有用性ある介入方法の一つであることが明らかになった。次に、治療過程の高齢がん患者は身体的機能の低下に治療の副作用が重なり合い、苦悩が重複しやすいことが示された。そのため、高齢がん患者が現状を理解し、自ら選んだ治療を受け入れ、主体的な治療・療養行動をとるためにも納得する必要性が示唆された。今後、高齢がん患者の看護介入プログラムを構築する上で、生活史による介入に、アウトカムの指標の納得を用いながら実際の介入効果を検討することと、それに先立ち、高齢がん患者の治療に対する納得を明確にしていく必要が示唆された。

研究成果の概要(英文)：It is useful that an old cancer patient utilizes a life cycle. The treated advanced age cancer patient has a side effect of the treatment and physical functional decline coming at the same time. Assent is necessary an old cancer patient receives it, and to act for the subject. It will be necessary to examine a real intervention effect in future. In addition, it is necessary to do assent for the treatment of the old cancer patient definitely.

研究分野：がん看護

キーワード：高齢者 がん看護 生活史

## 1. 研究開始当初の背景

現在、日本の死亡原因第一位であるがんは依然増加傾向にあり、とりわけ、高齢者においてはがんによる死亡率が非常に高い状況にある(国民衛生の動向,2009).このような情勢の中で、慢性疾患としてのがんの様々な時期を生きる多様ながん患者と家族に対して、“がんと共に生きる”ことへの支援を軸とした看護実践を創出することが求められてきた(遠藤,1999).特に、長寿社会である日本では、長期にわたって“がんと共に生きる”時代となり、高齢がんサバイバーが多く存在している。

一方、高齢者は加齢に伴う衰退の要素と共に長い人生経験の中で培ってきた知恵や対処能力という成熟の要素をあわせもった存在である。高齢者看護を展開していく上で、衰退の要素にとらわれがちになるが、高齢者のより高い QOL を実現するためには、長年生き抜いてきた中で得てきた英知に注目した高齢者自身の持てる力、つまり成熟の要素に目を向けることが重要と考える。Rose Utley(1999)は、高齢がん患者はがんに対して、長い人生より培われた特有な意味づけをしていると指摘しており、Janet Harden(2008)や Angela Sammarco(2001)は高齢者の持つライフステージを考慮しながら看護介入していく必要性を指摘している。

このような、高齢者の成熟の要素をより生かしセルフケアを高めていくためにどのような支援が必要なのかを探索するため、高齢がんサバイバーとして“がんと共に生きる”上での受け止めについて調査した(平成19年～21年文部科学省科学研究費補助金若手研究B)。その結果、高齢がん患者は、「療養生活の辛さを体験し、再発や治療効果、残された寿命に対する不安などががんが持つ苦悩に上乗せして、がんの罹患に伴う症状や治療などで徐々に弱わり、虚弱化する自分を目の当たりにしていた。半面、高齢がん患者は第一線を退き、この年まで十分生き抜いてきたと

いう気楽な思いや人生の荒波を超えてきた経験からくる自信を兼ね備えており、たとえ死が先に見えても、生の限界を自然に受け入れるような力強さを持ちながら“がんと共に生きて”いる」ことが明らかになった(今井,2009)。つまり、高齢がん患者は生活の中で培ってきた経験より得た知恵や対処能力という成熟の要素を用いて“がんと共に生きる”ための前向きな力を生み出していることが示唆された。この背景には、高齢者が生活者として歩んできた長い生活史の中で、様々なストレスに遭遇する経験から獲得してきた対処能力が、高齢者の特有能力として備わっていることを示していると思われる。そして、高齢がん患者がもつ生活史を上手く看護に取り入れていく工夫が成熟の要素を活用し、高齢者のもてる力を強化していくことにつながると考えられ、高齢がん患者に対する独自の看護介入の開発につながると期待できる。木下(1993)は生活史とはケア従事者によって理解される、ある特定の高齢者の生きてきた軌跡と定義しており、人間的で意味のある関わり合いをし、社会的関係を築いていくためには高齢者の持つ生活史を知る必要があると指摘している。

生活史が高齢者の過去の個人情報のみならず集積ではなく、ケア従事者の解釈と分析をも含んだその人の人となりに関する作業仮説であるということは、それが日々取りもたれる高齢者との関わり合いにおいてひとつの羅針盤になることを意味しており(木下1993)、生活史を高齢者のケアに活用する重要性が示されている。

高齢がん患者を対象にした先行研究では、高齢がん患者ががん罹患したことよりどのような体験をしているのか、化学療法(中村,2002)や在宅療養(繁澤,2006)、告知時(山田,2004)など様々な場面における体験を明らかにしている。しかしながら、高齢がん患者が今まで長年培ってきた生活者として持

つ成熟の要素に着目した研究は十分に実施されておらず、それを活用する看護援助は未確立の状況にある。

以上のことから、今後ますます増えるであろう高齢がん患者に対して、“がんと共に生きる”ことに適応し、よりその人らしく人生の最終段階を生き抜くことを支援するためには、高齢者特有の成熟の要素を組み込んだ支援体制を確立していかなければならない。この支援体制確立のためには、高齢がん患者が長い人生経験の中で培ってきた知恵や対処能力を得ながら、生活者として歩んできた生活史を明らかにし、「高齢がん患者の生活史に注目した看護介入プログラム」を開発することが急務である。

## 2. 研究の目的

本研究は、高齢がん患者の生活史に注目した看護介入プログラムの開発を目指し、その示唆を得ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

はじめに、国内の高齢者・がん患者・生活史に対する文献を収集し、それをもとにがん領域における生活史の活用方法に関する文献検討を行い、用語を整理した。文献検討は医中誌を活用し、そこから孫文献や重複文献を抽出しながら、文献検討を実施した。

次に、対象となる高齢がん患者の実態を明らかにするため、質的研究を用いて半構成的面接調査を行った。質的研究の実態調査を踏まえて、高齢がん患者の生活史の活用や実態を踏まえて、介入プログラムの方向性を検討した。質的研究では、クリッペンドルフの内容分析を用いて行った。

## 4. 研究成果

本研究は「高齢がん患者の生活史に注目した看護介入プログラム」を開発することを目的とした。生活史に関しては、ライフヒスト

リーやナラティブ・アプローチ、回想法、自伝史など様々なとらえ方より看護ケア方法として取り込まれている。そのため、生活史というキーワードで過去にどのような研究がどの数ほどあるのかを把握した。

そこで本学の検索サイトである医中誌を基にして「生活史」というキーワードで、各年代別に研究数を把握し、更に各研究内容を調べた。加えて、研究内容から「生活史」を本研究で用いる意味合いで使用している質的研究を抜き出し、そこから「生活史」という用語が、各質的研究内でどのように用いられているのかを検討した。その結果、「生活史」は多数の意味合いを含む用語であることを発見した。同時に、「生活史」という用語にはライフストーリーやライフヒストリー、ライフレビュー等多数の類似する用語が混在しているため、各用語の整理を図書や先行研究を用いて行う必要性が生じた。その結果を日本がん看護学会にて「がん領域における生活史を活用した文献レビュー～高齢がん患者ケア視点としての模索～」で発表した。この結果より、がん領域における生活史の活用は、療養過程における体験を意味づけさせる手法として活用されていた。生活史を活用した介入では、患者自身の認識の変換をもたらす効果があり、ネガティブな状況をポジティブに捉えなおしていく介入の効果をもたらす。これらのことから、高齢がん患者で生活史を活用することは、経験の意味づけだけでなく、高齢がん患者の強みの部分を意図的に引き出すことが考えられた。このことから、高齢がん患者の生活史を活用することは、高齢者の持てる力を生かした有用性ある介入方法の1つであることが明らかになった。

次に、対象となる治療過程の高齢がん患者の実態調査の結果、20名の高齢がん患者に面接調査を実施した。この結果から、治療過程の高齢がん患者は高齢に伴う身体的機能の低下に治療に伴う副作用が重なり合い、苦悩

が重複しやすい状況下で治療を受けている現状が示された。そのため、高齢がん患者が現状を理解し、自ら選んだ治療を受け入れ、主体的な治療・療養行動を支援していく事が重要であることが推察できた。そして、最終的なアウトカムは治療に対する納得であることが示唆された。

今後、高齢がん患者の看護介入プログラムを構築する上で、生活史を活用した介入に、アウトカムの指標として納得を用いながら支援する必要性を示唆された。今後は、実際の介入効果を検討することと、それに先立ち、高齢がん患者の治療に対する納得を明確にして、介入効果をみるためのアウトカムを明確していく必要が示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 1 件)

①今井芳枝：がん領域における生活史を活用した文献レビュー, 第 27 回日本がん看護学会, 2013 年 02 月 17 日, 石川県立音楽堂(石川県、金沢市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

今井 芳枝 (IMAI, Yoshie)

徳島大学・ヘルスバイオサイエンス研究部・助教

研究者番号：10423419

##### (2) 研究分担者

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

研究者番号：